

---

# 異界戦争

白い風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異界戦争

### 【Nコード】

N1500B

### 【作者名】

白い風

### 【あらすじ】

普通の男の子が普通にデートに行くために電車にのったのはいいが・・行き着いた先は・・・そして、彼の運命の輪が、徐々に、波乱へと導かれる・・

## 第一章 別れ

### プロローグ

西暦2007年・・・物語は普通の男の子を中心に魔可不思議な展開へと発展していく。彼は無事に生き残れるのだろうか

## 第一章

俺の名前は

「竜崎 薫」

今年の9月で20歳になる。20歳だからって別になにかが変わるわけでもない。いつも通りだ。そんな事より早く仕事を見つけないと、アパートの家賃も払えないし、食事もできない。とりあえず、今は幼なじみの女の子

「可憐」

が家賃だけを払ってくれている。ありがたい。

俺には親がいない。てゆうか二人とも俺を残して行方をくらましたらしい。だから俺は学校に行つてない。小中高の12

年間はずっと空手をしていた。自己流だが・・・。

いつもの様にコンビニに行き、仕事情報誌を見ていたら後ろから、今では誰も知らないひざかつくんをされた。

「今時すんなよ・・・」って思いながら後ろを見ると見慣れた顔があった。『なにかいいところあったあ？』っと可愛らしく聞いてきた。さっき紹介した幼なじみの可憐だ。

俺はパラパラっと目を通して

「いや、いいところはあがあるが給料が安い。これじゃバイトをしたほうがマシだな。」俺が残念そうに言うと、  
「そっかあゝ・・・」

と、可憐がもつと残念そうに言った。俺の事を本気で考えてくれるのは可憐だけだ。  
そう思いながら可憐を見ていると、可憐がいきなりこつちを向いて

「もうすぐ誕生日だね」

とやってきた。俺は誕生日なんてどうでも良かった。他人事の様  
様に

「そつだな。」

と言った。すると可憐が、街に遊びにいこうと言ってきた。

最近、街には行ってなかったから、たまにはいいかなと思  
行くことにした。可憐が楽しそうに喜んでいた。

遊びに行く日、てゆうかデート当日の朝。九時くらいに起きた。  
シャワーを浴びて、朝食を摂っていると携帯電話が鳴った。可  
憐からだった。「もしもーし！おはよう。起きてたあ!？」

朝からうるさい奴だ。耳が痛い。

「元気いいなあ。鼓膜破れるかと思ったよ。」  
俺が迷惑そうに言うと

「ごめんごめん。」と、軽く謝った。

「今日のる電車の時間12時だからね！遅れたらビンタ10往復よ  
！じゃ、また後でね」

言うだけ言って切った。時計を見ると10時半だった。着  
替えを済ませて、なんやかんやしていると11時になっていた。

時間が進むのは早いものだ。そう思いながらアパートを出た。

駅に着くとすぐに可憐を見付けた。ミニスカートに、ブーツを履いて、ジージャンを着ていた。服装よりも、目のいったのが綺麗な長い髪だ。

可憐はよく見ると可愛いことに今更気付いた。

向

こつこつちに気付いて、

「かおる〜！」

と言いながら近づいてきた。「わりい。待たせたな」

と申し訳ない感じで言うと、可憐は、大きく首を横に振って

「ううん。今来たところ。」

でた！デートで定番の会話。

とりあえず切符を買っ

てホームに向かった。

ホームで電車を待ちながら、可憐と話していると騒々しい笑い声を撒き散らしながら、コギヤル集団が現われた。うるさいなあ、と思いつながら見ていると、コギヤルが俺を睨んできたからすぐに目を逸らした。

そうしているうちに電車が来た。空いている席に座り、景色を眺めていた。コギヤルを見ると地べたに座り化粧を直している。空いている席があるのになんで？と思いつながら見ていた。ちらつと可憐を見ると寝ていた。電車の揺れが心地よかったのか爆睡だった。

二駅過ぎて、電車の中は俺たちとコギヤル集団だけだった。俺以外、全員寝ている。

俺もいきなりすごい睡魔に襲われ眠る5秒前だ！その直後、まわりの景色が歪んだ感じがしたが、気のせいだろうと眠ってしまった。。。

どのくらいいたただろうか。。。

数分かもしれない・数時間かもしれない。

目が覚めると可憐が横にいなかった。

トイレかと思い、外の景色を見た瞬間生まれて初めてわが目を疑った！空が赤い！！夕日で空がたまに赤くなるが、そんな綺麗な赤ではなく血の赤だ！慌てて車内を見るとコギヤル達もいない！

「きゃあああー！！！！いきなりすごい叫び声が聞こえた！！可憐だ！！」  
全力疾走で最後車両に行く

腰の抜けた可憐と、お腹がぽっかり空いたコギヤル達がいた。いや、コギヤルたちの無惨な死体があった。可憐は俺に抱きついてきた。当たり前だ。俺も少し恐かった。

「なにかいる。」

そう思い辺りを見回したがなにもいなかった。

可憐が落ち着いてきた。

「だいじょうぶか？少しはよくなった？」

可憐はまだ少し震えていたが

「うん。だいじょうぶ」

と強気に言った。

ここにいたら危険だろう・・・と感じたので電車からでた。周囲を警戒しながら可憐と駅みたいな建物から出ると俺たちは言葉を失った。

そこはまるでドラゴンクエストのような世界だった！辺りに町や村はないが遠くの方にお城みたいな建物と大きな街が見えた。

人がいるんだ！と、ほっとした。可憐に

「近くに町か村があるはずだから探そう」と提案した。

すると可憐は、しっかりと頷いた。

かなり歩いた・・・。二時間は歩いた。

「少し休もう」

と可憐に言った。

「そうね。かなり疲れた。」

とだるそうに言った。休憩していると可憐が

「なんでこんなことになったんかなあ？」

と聞いてきた。

そんなの俺が聞きたい！と思

った。

「わからない。」

素直に言った。

「あのね・・・」

不意に可憐が話し掛けてきた。その時、後からガサガサガサつと何かが近づいてくる音がした！可憐から瞬時に後に目をうつすと恐竜みたいなモンスターがすごい速さで近づいてきた！

可憐に

「はなれてろ！」

と叫んだ。が、可憐は動かなかったとゆうか動けなかった。モンスターが可憐に近づき口をクワツと広げて襲い掛かった。

無我夢中で可憐の前に立ちモンスターの牙が俺の横腹に突き刺さった！

「があ・・・！」

変な声が出た。お腹を見ると血がどんどん溢れてくる！頭がクラッとしてその場に倒れてしまった。

その時、可憐がこっちに向かって走り寄ってきた。その後からモンスターが可憐に向かって爪を振り下ろした！

俺はその時

なにもできなかつた。ただ見ているしかできなかつた。そんな自分が情けない！

「かれーん！！！」

俺の目の前で可憐はお腹が無くなった。可憐はその場に倒れた。可憐の息の音が、だんだん小さくなっていくのがわかった。

「可憐！！死ぬなっ！死ぬなあああ！！！」

可憐は俺を見て微笑んだ。とても死ぬ間際の人間の顔とは思えない穏やかな笑顔だった。

「薫。まだ言ってなかつたことがあつたんだ。あのね私・・・」

「

俺の目に水溜まりができた。そ

れは初めて見る自分の涙だった。

「

私・・・薫が大好きだった。愛してたよ。それから・・・誕・・・生・・・日・・・

・おめでと・」

可憐が息を吸った。

そのまま動かなくなった・・・。

もう、俺にはなにもなくなった。

守るものも、希望も・・・。

残ったのは絶望だけだった。

モンスターがこっちに襲い掛かってきた意識が失いかけてきた。

疲れた。

諦めた。モンスターの

牙が目の前にグワツと広がった瞬間、モンスターの頭が目の前から消えた。　なんだあ！？と意識が薄れゆく中びっくりした。

モンスターの頭と胴体が真つ二つになったがまだ動いていた。

向こうの方を見ると一人の人間が立っていた。　こ

っちに近づいてきた。俺はびっくりした。

モンスターを倒したのは女性だった。しかも女性は可憐に似ていた。

可憐のことを思い出すと胸が苦しくなっ

ていった。意識が遠退いていくなか、

「可憐・・・。」

なぜか可憐の名を呼んだ。もういないのに・・・。

女性がなにか話し掛けてきた。なにも聞こえなかった。

目の前が真つ暗になり、眠るように意識を失った・・・。



## 第一章 別れ（後書き）

反響があったり、気が向いたら書きます。

## 第二章

### 旅立ち（前書き）

気が向いたので書きました

## 第二章 旅立ち

### 第二章

目が覚めた。いつもなら目を開けると見慣れた、白い天井があるのだが今日は違った。丸太が並んだ天井が目に映った。

ここはどこだ？ さつきモンスターに襲われて・・・俺は・・・確か・・・それ以上は思い出さなくなかった。自分の身に起きたことを否定したかった。受けとめたくなかった。

だがそれは紛れもない現実だった。可憐がいた。いや、正確には可憐の死体があった。ベッドに寝かせられ、微笑んでいるような顔で眠るように死んでいた。「可憐・・・」

起き上がるうとしたが、激しい痛みで襲われ起き上がれなかった。「まだ動くではない。傷口が開いちま

うじゃあないか。」

声のした方を見ると変な爺さんがいた。

「じいさんだれだ？ 俺を助けてくれたのか？」 すると

爺さんは煙草を吹かし笑いながら、「ワシにそんな力はないわい。助けたのはこの村の用心棒、エミルじゃよ。」

俺は気を失う前のことを思い出した。

そういえばあのモンスターを倒したのは女性だった。あの人がエミルか・・・。「爺さん、俺の命の恩人を呼んできてくれないか？ 頼むよ。」

と言って頭を下げた。すると爺さんは、

「うむ。呼んでこよう。」

と言って外に向かって歩きだした。

一時して、爺さんが戻ってきた。だが一人だった。顔も申し訳なそうだった。「すまんなあ。エミルはファースト城下町に行つたみたいじゃ。」

と、頭をボリボリ掻きながら無責任に言った。

てゆうかなんでお城なんてあるんだあ？と疑問をもった。今は2007年だ。そんなのあるわけない！

それに、ここはホントにどこなんだ？不安になり、たまらず爺さんに聞いた。「爺さん、ここはどこだ？」

すると、爺さんは椅子に座り、煙草を地面に捨てて、お茶みたいなのを飲みながら

「ここか？この村はクォーター村じゃよ」と言った。

いやいや、村の名前なんてどうでもいいよ！

「村の名前じゃなくて、え〜とこの国はなんて名前なんだ？地球のどの辺にあるんだ？」

すると爺さんは不思議な目で俺を見た。「おいおい。若いのが、ボケたのか？おもしろくないわい。」

すると爺さんは椅子から立ち上がり、家から出ていこうとした。

俺は結構でかい声で、「待つてくれ。まだだ、まだでここがどこかわからないんだ。」

すると爺さんは、ため息をつきまた椅子に座り、話してくれた。

「この世界に名前などない。好きに呼べばいい。そして一年前、今ではこの世界の王とゆうか支配者

「タイタン」

と言うものが現われたんじゃ。奴は変な力を使ってモンスターを狂暴にして町や村を襲わせている。被害は増えるばかりじゃよ。」

爺さんは、ふうーと息を吐いた。

王？支配者？訳分からんと思った。変な力って魔法みたいなものか……。一人で質疑応答していると、爺さんが俺を波乱へ導く発言をした。

「前までモンスターは食物を荒らしたりしていたんじやが、人を襲ったりはしていなかったんじや。」

何！？と思いまくしたてるように

「じ……じゃあそのタイタランとか言う奴のせいで可憐は……！」

爺さんが冷静に

「タイタンじやが……。」

と、軽くツツコンだ。俺は考えた。そのタイタラン……じゃねえや！タイタンをぶっ倒して復讐を果たすか、このまま家に帰るか、この世界で暮らすか……。

だけど、まず帰り方が分からないし、こんな空が赤い世界では暮らしたくなんかない。

とはいっても、タイタンの野郎がどこにいるか分からない。

だが、はつきりしているのは、このしょぼい村にいても事が進まない。

とりあえず、エミルを探しに行こうと思った。

俺

をまじまじと見ている爺さんに、

「爺さん、ファースト城へはどうやって行くんだ？」

と聞いた。爺さんがびっくりしたみたいで、目が点になつた。

だが真剣な俺の顔を見て、立ち上がりなにかを探しながら「若けえのよお。復讐心からは憎しみしか生まないんじやよ……。それを覚えておくんじや。」

俺はその時ほとんど聞き流していた……じじいの戯わ言だと思つてさ……。

俺が黙っていると、爺さんが刀みたいに細長くて黒い剣をベツ

ドに立て掛けた。

「それをお前にやる。外は物騒じゃから……。少ないんじゃがこれを持っていきな。」

多分この世界の通貨だろう。金貨を10枚くれた。

「じゃあ行くよ。」

と言って、ベッドから起き上がった。さっきよりすごい痛みが体中を走り抜けた！だが、我慢した。  
爺さんが笑いながら、

「おいおい。無理したらホントに死ぬぞえ。それでもいくんか？」

「ああ。思ったら即行動が大事さ。」

ベッドからでて、もう動かない可憐を見ながら剣を腰に差し、金貨を財布に入れた。

肩に掛けてた黒いポーチに財布、携帯を入れて、持ってきていた帽子を被った。

爺さんが羨ましそうに言った。

「若いってのはいいなあ。じゃがほんとに大丈夫なのか？」

俺は自分の信念としている言葉をか

つこよく言った！

「わからない。なんかなるさ！やらなきゃ何も変わらないだろ！」

爺さんが頑張れよと目で言ってきた。俺

はその言葉にならないメッセージを受け取り、可憐の横に立ち、唇にキスをした。

冷たかった。爺さんに携帯を渡して、

「可憐を埋葬して墓を作ってやってくれ。必ず戻ってくる！これを預かっててくれ。」

爺さんが、すっかり頷いてくれた。最後にファースト城への行き方を聞き、爺さんに

「ありがとう」

といって別れた。

村の入り口に着いた。いざ出ようとする後ろから声がした。子供3人が駆け寄ってきた！鼻水を垂らしながら聞いてきた。

「兄ちゃん、村から出たら危ないしいけない事なんだぞー！」悪ガキ的な子が言った。

俺は大人っぽく

「俺は強いからだいじょうぶだよ」

今度は可愛らしい女の子が、

「なにしにいくのお？」

と聞いてきた。

「それはね・・・」

言おうとしたら突然もう一人の子供が奇声を発しながら居住区に走りだした！

なんで？と思い振り返ると、可憐を殺したモンスターの親玉が現われた！

俺よりでかかった

！2メートルはある！すかさず剣を抜いた。刀を見ると、一瞬だが見惚れてしまった。刀身も真っ黒だった。鍔の部分だけ、真っ白で後は美しい黒だった。子供二人はびーびー泣いている。

この時、自分と可憐に誓った。もう誰も殺させない、誰も悲しませない。悲しむのは俺だけでいい。

可憐の事を思い出した。可愛い笑顔を振りまいて、いつも俺の心配をしてくれた。そんな可憐を愛していた。それを可憐が死ぬ間際に気付いた。

その可憐を殺したモンスターの親玉がここにいる。モンスターを憎み、剣をモンスターに向けて切り上げた。

鮮血が雨のように降っていた。子供の方を振り向き、さっきの質問に答えた。「何の為に旅立つのかだったよね？それはね、自分自身の為、そして復讐の為だよ。」

剣を鞘に戻し、優しく笑顔で言ったが、心のなかは復讐の黒い炎が燃え盛っていた。

外に向かってゆっくりと歩きだした。さっき俺がいた場所にモ

ンスターの頭が落ちてきた。

俺の長い復讐の旅が始まった・・・。



## 第二章 旅立ち（後書き）

どうでしたか？

全然自信ないので弱気です。

また気が向いたら書きます。では・・・。

### 第三章

### きっかけ

#### 第三章

歩いている。かなり疲れてきた。多分四時間以上は歩いていると思う。

今のところ周りには、村も町もない。川がさらさらと流れているだけだ。

だが、クォーター村に戻る気はない・・・。

憎きタイタンをぶつ殺すために可憐の復讐に燃えているからだ。それに戻るのはまた四時間もかかる。

来た道に戻るくらいなら、危ない道を進んでも、先に進む覚悟だった。それにしても、歩きながら思ったのは空が赤いのと、車がないだけで、他は何も日本と変わりがない。そして気付いて驚いたのは、太陽がない！それに、こっちに来てから、20時間はたっているはずなのに夜がこない。

この世界には、朝も昼も夜もない。

それはそれで便利なことだ。舗装されていない道を歩いていると、小さな町が見えてきた。「疲れてきたし、腹も減つたなあ・・・少し休もう」

俺は足早に町に向かっていった。

町に着いた。あまり広くないし、人も少ない。

だがそんな事は関係なかった。とりあえず飯の食べれそうなところを見つげるために、歩いてみた。

すると、宿屋みたいな建物があった。建物はぼろいが、中からいい匂いがした。さっそく中に入った。

中に入ると、思ったとおり狭かった。カウンター席が四つあり、テーブルが二つあるだけだった。二階が寝室みたいだった。

とりあえず、この店で一番安い物を頼んだ。

五分くらいたって、おじさんが焼き魚を二匹持ってきた。

「サービスだ。金は一匹分でいいよ。」

怖い顔してるのに優しかった。おじさんの顔が今でも忘れられない。

がつがつと、魚に食らい付いていると、女性の悲鳴が聞こえた。まったく気にせずにいると、店のドアが蹴り破られた！大柄の男二人が、女性を人質に金貨を出せと要求してきた。おじさんが布袋に、30枚くらい金貨をつめて、男に渡すと男たちは、女性を連れて出ていこうとした。

俺がちらつと女性をみると凄い顔で睨んでいた。

「あなた最低よっ！助けようともしないで。臆病者！」  
的な感じで。

大男達が出て行って、おじさんが壊れたドアを直していた。

俺はお茶を飲み終わると財布から金貨二枚を出し、カウンターに置いた。

「おい兄ちゃん、金貨は一枚でいいよ。それとも募金でもしてくれるのか？」

口は笑っていたが、目は笑っていなかった。

「いや、また後で取りにくるよ。」  
と言って店から出た。

町の入り口に走って向かった。結構足は速いほうだから、すぐに着いた。

入り口辺りに、大男達がげらげら笑いながら、金貨を数えている。その横に、女性が手足を結ばれて、口を塞がれて座らされていた。今にも泣きそうだった。

歩いて大男達に近づいていった。

話が変わるが、今までバイトを、色々してきたが、一番稼げた仕事  
が、片付け屋だった。

大犯罪をしたにも関わらず、悠々と生きている奴を殺したり、ヤクザの仲間になり、その組みの組長を暗殺したりと、ろくでもない仕事ばかりだった。だが、成功すれば高い報酬をもらえた。それに力もつけることが出来た。

大男達に話し掛けた。

「お兄さん方、どうかそのお金を返してもらえませんか？ついでにあつちの人質も。」

大男達が大笑いしながら、

「なっはっはっは。チビが！痛い目みないうちにさっさと消えなあ。」

と俺を見下しながら言った。

俺は、はあっ〜とため息を吐いて、近くにいたお婆さんに、

「おばあさん、医者を呼んだほうがいいよ。今から怪我人が出るからねえ。」と言った。

大男の一人が、

「怪我人なんかでやしないぜ！それよりな、ねずみを連れてこい。死体を処分してくれるぜ！」

大男がナイフを抜きながらドスのきいた低い声で言った。

俺も剣を抜き

「じゃあ、百匹は必要だな。こんな大きな死体処分するのは大変だろう。。。」

大男のもう一人が、

「チビがあああ！ほざくんじゃねええ！！」  
叫びながら突っ込んできた。

こんな奴はただ力が有り余っているバカだ。

ひょいっと横に素早く避けると、大男はそのまま、家の壁に激突した。

起き上がって、また突進してきたら厄介なので、両足のアキレス腱を切った。大柄の体には似合わない甲高い叫び声があがった。

大男はそのまま気絶した。もう一人の方を見ると、女性の首元にナイフを当てて叫んできた。

「こいつを助けたければ、その場を動かずに剣を前に投げ捨てる！」

俺は言われたとおりにして、手を上にあげた。

大男が、興味深そうに剣を眺め

「なかなか高そうな剣だ。売れば金になる。」

男が、剣を拾おうとしゃがみこんだ瞬間に、猛ダツシュから膝を突き出し男の顔面にクリーンヒットさせた。大男がのけぞり、女性の首元のナイフが手からこぼれ落ちた。

後は楽だ。肩に剣を一刺しすれば言うことを聞く。俺は、

剣を拾い上げ、男のかい肩に、思いつきり剣を斬り下げた。

肩から真っ赤な血が溢れ出てきた。大男は苦痛の顔を見せ、肩に手を当てていた。

剣を鞘に戻し、男の前に立ち、余裕を見せながら、

「おい、あのもう一人の男を連れてさっさと帰れ！」

睨み付けながら見下すように吐き捨てた。

すると男は、立ち上がりもう一人の方に向かって歩きだした。

「観念したか・・・。」と、ふうつと息を吐き、倒れている女性の方に向いて走りだした。

「ガチャツ・・・」

と、後ろから金属音が鳴った。　・まさか。と思い、後ろを見ると、男がリヴォルバー拳銃を構えていた。　とっさに伏せようとしたが、後ろには女性がいる。　男が引き金を引いた！　すさまじい轟音が鳴り響いた！　と思うと、右手が後ろに跳ね、真っ赤な鮮血がたらーつと垂れ流れてきた。

痛がっている暇はない。次は、確実に頭を狙ってくる！　そう判断し、左手で剣を逆手に抜き、忍者刀みたいな構えで、相手に向かって突進した。

人を殺すのは慣れていた。だが殺したくはない。だが、殺さなければこっちが殺られる。

葛藤しながら、大男の胸に黒い剣を突き刺した。

黒い剣に、赤い血がフーッと流れてきた。そのままの態勢で、俺は一步も動かなかった。

大男の体から力が抜けた・・・。

俺は、剣を体から抜き取り、　いつのまにか気が付いていたもう一人の大男は俺の事を、まるで鬼を見るかのように怯えていた。俺は、剣を大男の目の前に突き出して、

「おい！こいつを連れて今すぐ消えろ！」

大男がへこへここと、這うように町から逃げていった後、女性を

解放した。

「大丈夫かよ？怪我はないか？」

と優しく言った。腕がかなり痛んだし、横腹の痛みが再発した。が、ぐっと我慢した。

女性は、安堵の溜め息をつき、ゆっくりと喋りだした。「ありがとう、たすけてくれて……。最初は助けられなかったと思った。睨んでごめんなさい……。」

俺は、あははつと、笑いながら

「あそこで喧嘩を売ったら店がぐちゃぐちゃだよ！もう大丈夫だから家に帰りなよ。」  
と言った。

金貨の入った布袋を持って歩きだした。すると女性が弱々しく「あの……、私の家ここじゃ無いんです。ファースト城下町にあるんです。」  
と言った。

じゃあ戻ればいいじゃんつ！と言いきりになったが、また襲われるのが嫌なのだろう。連れて行って欲しいみたいだ。

まあ俺もエミルを探しに行くからいいが……

「わかったよ。俺もファースト城に用事があるからさ。」

俺がそう言つと、女性は嬉しそうに、

「ありがとう！じゃあ早く行きましょっ！」  
と、言ってきた。

「いや、まだこの町に用があるからここで待っていてくれ。」  
と言つて、さっきの宿屋に戻った。

宿屋に着くと、おじさんが外に立っていた。

「よう、無事だったかい？その袋を見ると勝ったようだな！」

嬉しそうに言ってきた。俺は袋を渡した。 「じゃあ俺もう行くな。魚うまかったよ。」

おじさんに背を向けて歩きだした。するとおじさんが袋から、金貨を鷲掴みして、

「ほらよ。餞別だ。持っていきな！」

と言って、多分十枚はくれた。

振り返って、金貨を受け取った。ありがとう、と感謝の気持ちを伝えた。

おじさんがポケットから金貨一枚をだし

「預かりもんだ。しっかりがんばれよ！」

と言って、俺のポケットに突っ込んだ。

おじさんと別れて、町の入り口に行くと、女性が待っていた。

「遅いわよ。早く行きましょ。」

助けてあげたことを忘れたのか？と、聞きたかった！女はいつも自己中だ！と改めて思った。

この町から、ファースト城までは、すぐそこだ。 もう

目の前に見えるが、山の上にあった。しかし、軽く舗装されているので、なんなく登れそうだった。

登りながら女性に聞いた。

「あなた、名前は？」

と。すると女性は、なにも言わなかった。

少しして女性が同じ事を聞いてきた。女は自己中だ！と、改めて思った。 「俺は、薫だ。」



と言った。すると何故か笑われた。イラっとしたが耐えた！ 女性が、変な名前！と、言った。俺は結構、自分の名前が気に入っていた。

そんな話をしていると、いつの間にか着いていた。とても賑わっている。まるで祭りのようだ。

ところどころで、城の兵士みたいな人たちが、慌ただしく駆け回っていた。

さっそく、人混みに入ろうして、後ろを見ると、さっきまで居た女性がいない。ホントに女は自己中だ！それに恩知らずだ！と改めて思った。

あんな奴はほつといて、エミルの搜索を開始することにした。

ぱつと、人混みの中に目をやると、可憐が手招きをして、俺を呼んでいる姿が見えた。

まさかと思い、まばたきを試みたが、そこには誰も居なかった……。

横腹の傷がズキズキと痛み出してきた。

俺は……痛みをこらえて、エミルを探し始めた。

可憐の事を……思いだしながら……。

### 第三章

#### きっかけ（後書き）

今回のタイトル名の意味は、訳分からんと思うでしょうが、いずれ分かります。ではまた・・・

## 第四章 再会

### 第四章

俺は人探しをしている。

これで二十人は 話し掛けただろう。 だが、帰ってくる返事は、

「知らない。」  
という、冷たい返事だけだった。

確かに周りから見ると、俺はかなり目立っていたはずだ。ジーンズ姿に、上の服は、青と白のツートンカラーのジャージで、茶色いヘアバンドタイプの帽子を被っていた。

この世界にはおしゃれとゆうものが存在しないのだろう。たまに、服が売られているところを覗くと、全てシンプル・イズ・ベスト！で片付けられる。

金貨は今、二十枚ある。

これだけあれば、まあいろいろ買えるだろうと思い、エミル探しを中断して、なにかいい物が無いか、物色していると、店のおっさんが話し掛けてきた。

「おうおう兄ちゃん、なかなか強そうな目えしてるじゃねえか！  
目でわかるのか？と、聞いてみた。

「そんなのはどうだっていい。それより・・・兄ちゃんよ、今あ、  
金に困っちゃいないか？」

俺は、財布をじゃらじゃらさせながら

「金貨が二十枚あるぜ。」

自慢気に言った。

するとおっさんが、

「その金貨が倍になる話があるんだが聞くか？・・・聞くなら金貨二  
枚だ。」

少し迷った。エミルを早めに探して、色々聞きたいことがあつたし、そんなことしている間に、城下町を去っていったら、またクォーター村に行かないといけなくなるからだ。

考えていると、おっさんが、

「おいおい、早く決めてくれよ。さっきの女は即座に教えて！つて行ってきたぜ。」

多分、危ない事をさせられるんだろう。と感じていたから、その仕事は結構時間がかかると思っていた。

だが、そう簡単に、危ないことに女が首を突っ込むか？

エミルは、たしかクォーター村の用心棒だ。もしかしたら、その女はエミルかも。と、期待を膨らませた。

おっさんに金貨を二枚払った。

「よし。教えよう。だがその傷でまともに戦えるかどうか・・・。

」  
じらすおっさん。早く教える！と、きつく言った。

俺は地下水道を歩いていた。百メートルくらい進むと、

「この先立入禁止！」  
の看板が立っていた。

おっさんに言われた通り、看板をどけて、石畳を思いっきり踏み付けた。

「・・・へ行くと看板がある。看板をどけて石畳をおもいつきり踏むと、石畳が外れる。すると、長い階段が現われる。後は階段を下りて、その向こうの扉を開けるんだ・・・後はみてのお楽しみだ。」

楽しそうに喋る、おっさんの顔を思い出した。

長い階段を下りると、扉が見えてきた。

扉に貼り紙があった。

「武運を祈る・・・」

扉を開けると、もの凄い映像が目に飛び込んだ。

「わあああー!!!」

と、観衆の歓喜の叫びが、幾重にも重なり莫大な音が、コロシウムに響いていた。高い壁が、俺を囲み、その上には、何百人とゆう人間が、俺を見ながら冷やかしたり、応援したり、ただ騒いでいた。

直径が、100Mはある闘技場の真ん中に、人の集まりがあった。

その中から、審判みたいな人が俺を呼んだ。

「そのあなた！早く来て下さい。」

俺は足早に、呼ばれたほうへ向かった。

「えー、それではこれより、賞金獲得サバイバルを開始します。」  
ああ、なるほど。っと、俺は納得した。  
確かに金が倍になりそうだ。ちらっと賞金の方を見ると確実に金  
貨が50枚はある。

「ルールなんですけど、武器は何でも使って結構です。サバイバル  
なので最後の一人になるまで終わりません。降参したり、気絶した  
ら負けです。相手を殺してしまつたらもちろん負けです。」  
力だけが取り柄っぽい男が、

「ふん！どうせ今回も俺様が優勝だあ！」 笑いながら言った。

俺はふっと笑い、「そんな事いつてすぐに負けたらダサいよ。」  
と、挑発してみた。

男が、

「おい、小僧！試合が始まつたら後ろに気をつけなっ！」  
と、吐き捨てて、準備室と書いてある部屋に入つていった。

試合が始まる前に、準備を整える時間が与えられた。俺は、なに  
もしないで試合を待っていた。すると、モヒカン頭の男が話し掛  
けてきた。

「嫌な奴に目を付けられたなあ。奴はいつも試合に出て、賞金を  
持ち帰っている。奴に勝てる人間はもういないぜ。」

俺は、笑いながら自信満々に言った。

「じゃあ俺は人間じゃあないな。」

コロシムに、十人の、戦う者達が立っていた。お互いを睨み付  
けながら、武器を強く握り締めていた。

俺は、剣をを抜かずに、試合開始を待った。百戦錬磨男の熱い視  
線を浴びながら。。。

審判が現われた。観衆の、歓声とも、罵声とも聞き取れる音がより一層大きくなった。

きよるきよると周りを見てみると、むさい男の中に、綺麗な女性がたたずんでいた。

ぼーっと見ていると、いきなり自分の体が、前に吹っ飛んだ！

「がはっ・・・！」

顔面から思いつきり地面に叩きつけられた！

鼻血が、どくどくと音をたてながら出てくる。

腹の傷口も開いて、じわじわと血が服に染み込んできた。

試合が始まったのだらう。広い闘技場のあちこちで、激しい闘いが始まっていた。観客がより一層うるさくなった

しまった！油断した！百戦錬磨男が大笑いしながら、

「後ろに気を付けろといったたる小僧。降参するかあ！？がっはっ

はっはっはあ！！」

憎たらしい野郎だ・・・俺としたことが・・・なんてまぬけなんだ！

だが、後悔している暇はなかった。

すぐに起き上がり、百戦錬磨野郎に向かって走りだす！・・・だが、いきなりモヒカン男が目の前に飛び出してきた。

最初から俺だけを狙ってたに違いない。「すぐに楽にしてやるから！そのままじっとしてなあ！ひゃっひゃあ！」

モヒカン男が、銃を構えて俺に狙いをつけた！

忙しいところに来やがって！と、心の中で愚痴を言った。俺は無言で、モヒカン男の横を走り抜けた！

百戦錬磨野郎に向かいながら、俺は剣を抜いた。

すると、無視されたモヒカン君が怒りながら、

「てめえ！無視すんじゃねえ！」

と、大声で叫びながら引き金を引いた！

予定どおりだ！そう思いながら右に避けた！

俺の前にいるのは、もちろんあの男。

銃弾は、そいつの脇腹をえぐりとった！

「ぬごほおあー！」

変な叫び声が、百戦錬磨男の口から飛び出した。

モヒカンが、ひええー！と言いながら、その場から逃げようとしたが、

「どごおん！」

とゆう轟音が響いた！

すると、モヒカンが、その場所から五メートルくらい吹っ飛んだ。空に赤い血を撒き散らしながら・・・

審判がモヒカンに近寄り、気絶しているのを確認して、外に連れていった。

百戦錬磨野郎を見ると、マグナム銃を持って、腹を押さえていた。

その腹からは血がどんどん溢れ出てくる。

「銃を使うとは意外だなあ。よく使い方を知ってるなあ。すごいですよ。」

相当バカにした言い方をした。もちろん百戦錬磨君は大激怒！

「てめえは死刑だあ！」

俺の頭に向かってマグナムの引き金を引いた。凄いい轟音が響き、銃弾が真直ぐ俺に向かってくる！

撃つてくるとわかっていてから、避ける準備は出来ていた。



しゃがみこんだ。銃弾は、後ろで戦っている、背の高い男の腕に当たり、背の高い男は苦しみながら降参していた。

百戦錬磨男は、マグナム銃に弾丸を詰めていた。

俺は、その瞬間を見逃さなかった。猛ダツシユからのとびひざげりで、百戦錬磨男の首が後ろへ跳ね、そのまま倒れた。

だが、さすがは百戦錬磨男だ！立ち上がるうとしていた。

立ち上がられるとやっかいだ。剣をゆっくり抜き、

「おい。降参しなくていいのか？」

と、見下しながら聞いた。

すると、百戦錬磨男は、

「ふん！これだから本番だ！」

と、強気に言った。

俺は容赦なく、降参するまで両足に突き刺した。

何度も何度も・・・。

男が大の字で倒れていた。顔からは、鼻血が垂れて、血溜まりが出来ていた。

下半身を見ると、大量の血が土に染み込み、足からはまだ血が出てきている。

その隣に、剣を持った男がいた。倒れている男をじっとみて、気絶しているのを確認すると、その場から走り去った・・・。

俺は、周りを見渡した。すると、俺以外に立っていたのは、女性だけだった。

女性も俺に気付き、こつちに歩み寄ってきた。

よく見るとどこかで見たことのある顔質をしていた。まじまじと見ていると、女性が話し掛けてきた。

「あら？あなた・・・確か私が助けた人よね？生きてたのね。よかったわ。あなた瀕死の状態だったんだから・・・。」

俺の勘は当たっていた！やっぱりエミルがいた。

エミルは、なんとなく可憐に似ている、と思っていたが、全然似てなかった。だが凄く綺麗な女性だ。少し見惚れていた・・・が、今は試合の最中だ。

「助けてくれたのは感謝してる。でも、試合は手加減しない。悪いが勝たせてもらう！」  
そう言っつて、剣を構えなおした。

エミルも、腰に巻いた、ベルトに掛けている短剣を抜いた。ベルトには、二丁の拳銃も吊されていた。

「そう？あなたに私は倒せないと思うわよ。少しは楽しませてね。」

「そう言っつた、次の瞬間、持っていた短剣を俺に向かって投げつけてきた！」

あまりにも唐突な攻撃に、戸惑ったが、短剣をギリギリのところまで弾いた！が、エミルは拳銃を抜いて俺に狙いを付けていた。

俺は、弾いた短剣を拾い、

「おらあ！返すぜ！」

と言っつて、エミルに投げ返した！

エミルは、拳銃をホルダーに直して、投げ返された短剣を刃の部分で受けとめた！

なんて動体視力だ！と驚いた。そしてエミルは、短剣を鞘に入れて、拳銃を二丁構えて撃つてきた！

「ドゥン、ドゥン」

鈍い発砲音がコロシウムに響き、俺の右腕と右足を弾丸が貫けた！

右足の痛みは我慢できるが、右腕を貫けた弾丸は、怪我をした場所だったからとてつもない痛みが体中に走り、そのまま意識を失ってしまった・・・。

俺は目が覚めると、ベッドに寝かされていた。

入り口を見ると、ドアに寄り掛かっているエミルがいた。

「目を覚ましたのね・・・よかったわ。」

俺は皮肉たつぷりに言った。

「あんたが撃つて、気絶させたくせに心配すんなよな・・・。」

そういいながらエミルを見た。やっぱり可憐には似てないな・・・なぜかがっかりした。

するとエミルが、こっちに歩み寄ってきた。

「あなた、変な格好してるわね？どこから来たの？」

多分、この世界の間人間が一番聞きたいことを聞いてきた。俺は今までの事を話した。もちろん可憐の事も・・・

全てを話終えて、ふうつと息を吐いた。

「別に信じられないなら信じなくてもいいから。」

黙って聞いていたエミルが、口を開いた。

「私には弟が居たの。16歳で、死んじゃったけど。いえ、正確には殺されたわ・・・。タイタンに・・・。」

俺は、何も言わず黙って聞いた。

「この世界の空が赤いのはタイタンのせいよ・・・。ずっと前までは、この世界はとてつもなく平和だったわ。だけどいきなり、タイタンがこの世界に現われたわ。どうやって現われたかは解らないけど・・・。」

「

するとエミルは、窓を開けて、真っ赤な空を見ながらこう言った。

「この空が、赤から黒に変わるとき、悪夢のような戦いが再び始まるわ……。今度こそ、この世界は魔界に変わってしまうわ……」  
俺はあまり読み込めなかった……。が、嘘では無いことは、エミルの表情から分かった。

「な、なにさ……。その戦いって……。」

俺は、恐る恐る聞いた。するとエミルは、下を向き、目を閉じて、弱々しく口を開いた。

「……。異界戦争よ……。」

つづく

## 第四章 再会（後書き）

疲れました・・・      なんだか、上手く出来ませんで  
した・・・。 すいません。 つづきが考え付いたら書きます。では・・・

番外章 彼と彼女の戦い（前書き）

最後まで読んでくださったらとても嬉しいです。

## 番外章 彼と彼女の戦い

### 番外編

・・・あの日を境に、私の人生は大きく狂い、大事な、たった一人の家族を失った・・・。

私には、親がない。

母親は、体が弱く、弟を産んですぐに死んだ・・・。父親は、私と母を置いて、家を飛び出した。理由も言わずに・・・。

だから、私の家族は弟だけ・・・。その弟も今日で16歳だ。

わがままな弟だけど、たった一人の肉親だ。

私は、16歳のお祝いに料理を作るため、買い物に出掛けた・・・。私の住んでいる町は、かなり発展していた。

店がたくさんあり、人も大勢暮らしていた。そして、お城もあり、この世界の統知者が暮らしていた。

とりあえず、目当ての物を買って、ブラブラしていた。

それにしてもこの空はなんだろう・・・。数カ月前までは綺麗な青色だったはずなのに、今は真っ赤な血の色をしている。

何かの前触れなのか？それとも異常現象なのか？よく見ると、赤黒い部分もある。不意に、背筋がぞつとした為、足早に、家路へ向かった。

その時、その赤黒い部分が、じわじわと広がっていた。だけど、私はその現象には気が付かなかった。

家に戻ると、弟が、外で木の剣を振っていた。最近はよくこうして剣を振っている。もうすぐ、賞金獲得サバイバルが、ファースト城であるからだろう。

料理を作り終えて、弟を呼んだ。

「リヨウー、ご飯出来たわよー！」 弟は、剣を振りながら、  
「もう少しやらせてくれよ姉ちゃん！俺が優勝したら金貨が手に入るんだぜ！」

と、自信満々に言った。

私は冷やかしながら、あんたにはまだ無理よ。と言ってあげた。  
弟が、舌打ちをして、剣を直し、家に戻ってきた。

テーブルにつき、弟の大好きな鳥の丸焼きを目の前に置き、  
「16歳おめでとう。なにかほしいものがあつたら言っていていいわよ。」  
すると弟が、待ってましたと言わんばかりの速さで  
「じゃあさじゃあさ、真剣買ってくれよお！」  
と、鳥肉を噛みながら、大きな声で言ってきた。

私は、そんなの必要ないと言いながら、窓を開けた。すると、いつも見ていた空が赤くなかった・・・。

真っ黒だった。今までの赤色が嘘のように、空が、漆黒に染まっていた。

すると、弟も空を見ながら固まっていた。

いきなり、家のドアが開いて、城の兵士が駆け込んできた。



「突然申し訳ありませんが、即刻お城の方へお向かいください。」  
私は、ゆっくりと兵士によりながら、

「なに？なにがあつたの？この空は何？」

私は混乱していた。

すると、兵士が落ち着いた口調で、

「とにかくお城へ……。事情は王からお聞きください。」

私と弟は、急ぎ足で城に向かった。

城に向かう途中、火事が起きている家が何軒もあり、その近くに、真つ黒な人が寝そべっていた。

城につき、城内に入った。豪華なシャンデリアが、天井から吊られていて、とても広い王座に、この町の住人が、ほぼ全員集まっていた。

みんな何があつたのか理解できておらず、呆然としていたり、泣きわめいたりしていた。

弟を見ると、いつものリョウとは思えないほど、冷静だった。

すると、一人の女性が王に、しがみつき、すごい形相で問い掛けた。

「なにが……なにがあつたのお！！！？どうして私たちだけがああ！！あなたのせいよ！あなたの……！」

混乱していて、言っていることがむちゃくちゃだった。

混乱している女性を落ち着かせて、王が立ち上がり、私達に向かって、考えられない事を口にした。

「この町は、まもなく崩壊する。だから、出来るだけ早く、この町から逃げて、ファースト城に向かってください。」

王の言葉が、もの凄く広い王座に響き渡った。

すると、あちこちから、なんで？という言葉と、何があったの？と、当たり前な疑問の声があがった。一人の男が王の前に立ち大きな声で、

「冗談じゃねえ！なんで崩壊するなんてあんたに解るんだ！俺はこの町を出ないぞお！」

と、怒鳴りながら言った。周りの住民も、そうだそうだあ！と、男に賛成していた！

すると、年老いた執事が、前に出てきて

「とにかく皆さん。ここには危険ですので、一刻も早く、城を出てください！」

と、とても老人とは思えない大きな声を出した。危険という言葉に反応して、大勢の人達が、一斉に自分の家へ向かいだした。

私と弟も、自分の家に向かって歩きだした。

私達は、必要な物を皮のバックに詰め込み、ずっと暮らすはずだった家に別れを告げて家を出た。

走りだして、家から少し離れた時、後ろから、爆発音がした。振り返ると、さっきまでいた家が、炎に包まれていた。私は、弟の手を引っ張って、町の入り口に走りだした。

入り口に行くと、コツカー（馬みたいな動物・陸上で唯一の移動手段）が10頭くらいいた。トロツコのような乗り物が、コツカーに付けられている。一つだけ、大きな馬車が付いているコツカー

がいた。その前に王が立っていて、周りには、兵士が十数人整列していた。

なにか、王が喋っている。すると、兵士達が馬車に乗り込みだした。

王が私達に気付き、悲しい顔をしながら、口を開いた。

「この町はもう終わりです。人が何百人亡くなったのでしょうか・  
・。少なくとも、人口は十分の一になりました。兵士や執事達も・  
・。」

私は黙って聞いていた。すると弟が、いきなり王様の顔をぶん殴った。

周りには、兵士や、残り少なくなった住民もいた。みんな目が点になっていた。殴られた王が、殴ってきた少年を呆然と見ていた。

殴った弟は、しつかりと王を見て叫んだ。

「悲しんでる暇があったら、仕返しをするために、色々と策を考えるよ！王様だろ！なんでもできるんだろ！」

王と兵士達以外、なぜこうなったかは解らないが、誰かから攻撃を受けたのは聞かなくても解っていた。なぜなら、入り口にくるまでに、血を流している死体がいくつも転がっていたからだ。

王は、弟に謝礼を言い、一部始終を見ていた私達に、コッカードでファースト城へ移動するように提案してきた。

私達を乗せたコッカードは、すごい速さでファースト城に移動していた。

同じトロッコに、さっき王様に怒鳴りつけた男が乗っていた。男は、不満そうに空を見上げていた。

無理もない。事情も聞かされず、住んでいた町を出ると言われたからだ。

一時して、ファースト城が見えてきた。

コツカーが凄い勢いで、城門をくぐると、即座に城門が閉じられた。

私達は、王座に通された。すると、髭を生やした、体格の良い中年の王様が、私達を待っていた。

「いつたい何があつたのだ？いきなりクストフ城の住民全員を、移住させてくれたなんて・・・ん？他の住民はどうした？」

本来なら、住民は千人いるのだが、今はたったの百人しかない。「これで全員です。他の者は・・・殺されました。いきなり変な生き者が現われて、城の兵士を襲い、町の住人を殺したり、家に火を付けて・・・」

クストフ王が、暗い顔で、初めて詳細を語った。ファースト王が、口を開こうとしたが、それより先に、私の口が開いた。

「でも、私達はなにも見なかったわ。それに、最初集まったときは、まだ900人は居たはずなのに、なぜいきなり100人に減つたの!？」

すると、クストフ王が突然笑いだした。

「ふっはっはっはっはあ！なんで減つたか解らないのかあ？お前の家は爆発しなかったのかあ？運のいい人間だあ！はっはっはっはあ！」

不気味に笑いながら、クストフ王が宙に浮いた。

みんな金縛りにあつたかのように、動けなかった。「ふっふっふ。そうさ。私が犯人だ。私が町の全員を殺した！家を爆発させてなあ！」

そう言いながら、クストフ王の体が大きくなっていくのがわかった。「あんたは何者なの？何が狙いなのか？」

私は、大声で叫んだ！すると、クストフ王は、楽しそうに笑いながら、

「暇つぶし。」

「あ、そうそう。私の名前はタイタンだ。」

バカにした言い方をしてきた。

ファースト王が、怒りに震え、銃を腰から抜き取り、タイタンに向かつて撃った！が、タイタンは、その場から消えた。弾丸が、天井のシャンデリアにあたり、直径2メートルのシャンデリアが落下し、粉々に砕け散った。

突然、タイタンの声が聞こえてきた。

「ふっふっふっ。この世界の人間は威勢の良い者ばかりだな。気に入った。この世界を、私が支配してあげよう。治安のよい世界になるよ。くっくっくっ。」

すると、ファースト王が、脅すように言った。

「残念ながら、私の軍事力を倒さないかぎり、この世界は支配できない。」

いきなり、タイタンが現われて、口笛を吹き出した。すると、外から今まで聞いたことのない鳴き声が聞こえてきた。

「ショータイムの始まりだ。退屈にしないでくれよ。」  
そう言い残して、また消えた。

タイタンと入れ替わるように、若い兵士が飛び込んできた！

「た、大変です！恐ろしい怪物の軍団が、ファースト城に向かつて来ています！もう一キロ先にまで迫っています！」

それを聞いたファースト王が、大声で、周りにいた兵士達に言い渡した。

「よく聞け！この名もない世界を、よその世界、異界から来たバカなどに渡してなるものか！我が軍事力をもって、必ず撃退・いや、壊滅するんだ！お前達、準備にかかれえ！」

ファースト城の兵士全員が、王座から出ていき、ファースト王は、

立派な椅子に座ってぼそつと言った。

「異界から来たものとの戦争・・・異界戦争の始まりだな・・・」

私達が、どうしていいか解らずうろたえていると、ファースト王が、「あなたたちは、ここにいてじつとしていてください!」と、言ってきた。すると、弟が突然立ち上がった。

私がどうしたの?と聞くと、トイレ。といって、王座から出ていった。

この時の弟は少し変だった。それに気付けなかった私はなんてバカなの・・・今はとても後悔している。

城から約一キロ離れた場所に、ファースト城の兵士と、元クストフ城の兵士、合計200人が武装して、待機していた。

その中に混じって、少し背の低い男の子が居た。彼も武装をして、腰には木の剣と、鉄の短剣を差していた。それは、紛れもなくリヨウだった。

とその時、目前に、おぞましい怪物の軍団が現われた。約300体はいるだろう。だが、兵士達はひるまずに、怪物達に向かって走りだした。もちろんリヨウも同じように・・・。

すると、怪物達も、戦闘態勢に入り、こっちに向かってきた。

二つの大きな固まりが、同時にぶつかり、一つの、とても大きな黒い固まりが出来た。

赤い血を撒き散らしながら、兵士と怪物達は、潰し合っていた。

その頃、リヨウがどこにも居ないことに気付いたエミルは、外に捜しに出ていた。

私は、遠くの方で、異界戦争が始まっているのを目撃した。嫌な予感がした。　急いで、黒い固まりに向かい、走りだした。

リヨウは、必死に闘っていた。自分の故郷を潰され、姉との平和な暮らしを潰された怒りに燃えていた。　すると、怪物の中に、タイタンを見つけた。

リヨウは目の前にいる怪物の首を切り落とし、首なし死体をタイタンの前に蹴り飛ばした。

「おやおや。威勢の良い坊やじゃないか！なんでこんなところに？迷子かな？くつくつ。」

なめた口調で挑発されたリヨウは、剣をタイタンに向け、言い放った。

「次はあなたの首を無くすよ！」

タイタンは、ふつと鼻で笑い、手を刃変形させた。　「殴られた時、なかなか痛かった。借りを今から返してあげるよ・・・！」

私は走った。全速力で走った。すると、黒い固まりはなくなっていた。

地に、点々と死体が散乱していた。中には、手足が無い死体や、首が無い死体、お腹がなくなっている死体があった。

その中に、立っている影が見えた。私は、急いでそこに向かった。

そこには、タイタンがいた。そのタイタンの腕が、斜め上に上がっていた。

その手の先に、リヨウが突き刺さっていた・・・。

おびただしい血を流しながら・・・。

私は動けなかった。今、目の前でなにが起きているか理解できない

かった。

すると、タイタンが、リヨウを地面に投げ捨て、私に向かって笑いながら言った。

「今回は、まあまあ楽しめたから引き上げよう。また暇つぶしにくるよ。次回はもっと派手にしよう。ではまた。」

そう言っつてその場から消え去った。同時に、怪物の死体も消え去った。

私は、リヨウに近付き、抱えあげた。冷たかった。顔も青ざめていた。目には涙が溜り、右手には、木の剣を握り締めていた。

私が15歳の誕生日に作っつてあげた木の剣を握り締めていた。

「リヨウ・・・起きなさいよ・・・。まだ・・・誕生日プレゼント買っつてあげてないわよ・・・私を・・・私を独りにしないでえ・・・！うう・・・。リヨウ・・・リヨーーーーー・・・」

一年後・・・

空は青く、風が気持ち良い。私は、リヨウが死んでから、体を鍛えて、今は各地で用心棒をしながら力を付けている。

久しぶりにファースト城に戻り、リヨウの墓標にお花を添えた。

きつと、またタイタンは現われる。私は、絶対にタイタンを殺す。弟の為、そしてこの世界の為に・・・。

空を見上げた。空は、綺麗なオレンジ色をしていた。久しぶりに見る、綺麗で不気味な空が眼前に悠々と広がっていた。



番外章 彼と彼女の戦い（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます。結構苦労しました。今度から本編に戻ります。ではまた・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1500b/>

---

異界戦争

2011年1月13日00時57分発行